『回想の大西民子』

北沢郁子 著 砂子屋書房 1997 年

民子の没後、友人であった北沢郁子氏が、民子との想い出を語った本。この中に掲載されている「着物のこと」に、遺された３着の着物について書かれています。

民子が遺した着物

一つ紋付羽織（No.14）

背縫いの上部に、「上がり藤」の紋を据えています。

羽織（No.16）

羽裏は紅葉、女郎花、桔梗と思われる秋の草花をあしらった、段替わり風の仕立てになっています。

長着（No.16）

長着（No.15）

大西民子（1924~1994）

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25 歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で迢空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994 年死去、享年 69。

2023 年 9 月 7 日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460

第 20 回 企 画 展

くらしの想い出

2023 年 9 月 7 日(木)～11 月 7 日(火)

No	種別	内 容
1	自筆原稿	「妹の届けくれし木犀匂ふ部屋仮名習はむと墨をすりゆく」
2	自筆原稿	「まどゐ得よと母が持たせくれし長火鉢独りとなりし部屋に位置占む」
3	書籍	『無数の耳』 大西民子 著 1966年刊行･初版 短歌研究社 掲載歌「短かかりし家妻の日々よみがへり菜漬けの石のぬめりを洗ふ」
4	自筆原稿	「金銀の箔の錆びたる帯重し鋏の先をきかせてほどく」
5	書籍	『野分の章』 大西民子 著 1979年刊行･初版 牧羊社 掲載歌「機械さへ悪意持つかと思ふまでテレファックスの像定まらず」
6	民子所有品	芹沢銈介デザインのテーブルクロス
7	自筆原稿	「校正刷りの届くを待ちて夜となりぬ手伝はむと言ふ少女と煉炭に寄る」
8	自筆原稿	「何時までも合はぬ算盤にいらちゆく西陽をまともに受くる座席に」
9	自筆原稿	「伝言板のわが名すばやく拭き消して駅を出づれば木枯らしの町」
10	自筆原稿	「雨のなかに人を待たせて少年の指いきいきとダイヤル廻す」
11	書籍	『印度の果実』 大西民子 著 1986年刊行･初版 短歌新聞社 掲載歌「夕焼けを遠く透かして人あらず四方ガラスの電話ボックス」
12	自筆原稿	「酔はぬ時に会はむと言ひて別れ来つたたむ羽織の裏がつめたし」
13	自筆原稿	「着くづれを直して戻り来し椅子のなぞへにたれの耳環か光る」
14	民子所有品	着物 一つ紋付羽織
15	民子所有品	着物 長着
16	民子所有品	着物 羽織･長着

資料はすべて大宮図書館所蔵です

参考文献

『私の短歌入門』 山本友一/編 有斐閣 1977年
『大西民子集-現代短歌入門(自解100歌選)-』 大西民子/著 牧羊社 1986年
『回想の大西民子』 北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
『評伝大西民子』 有本倶子/著 短歌新聞社 2000年
『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』 大西民子/著 さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
「波濤」2003年1月号 波濤短歌会事務局
「静岡市立芹沢銈介美術館 ホームページ」https://www.seribi.jp/serizawa.html

写真「自宅玄関前」

1　家庭生活

大西民子は、大宮に移住してから浄国寺(じょうこくじ)内の居室、文化会館の宿舎と度々引っ越してきましたが、1968(昭和 43)年旧大宮市堀の内に建売住宅を購入しました。民子が自宅の光景を詠んだ歌には、昔懐かしい暮らしの道具がしばしば登場します。

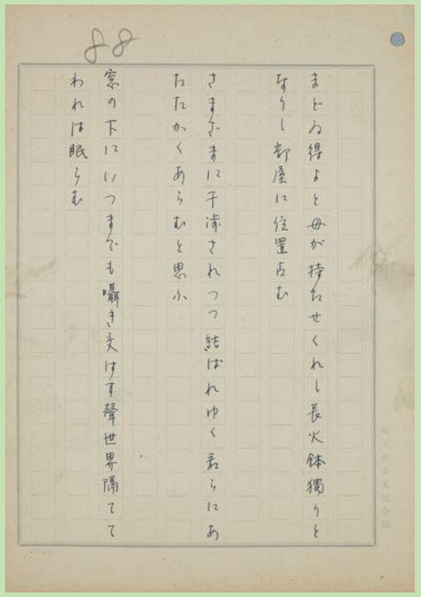
「まどゐ得よと母が持たせくれし長火鉢
独りとなりし部屋に位置占む」(No.2)

「短かかりし家妻の日々よみがへり
菜漬けの石のぬめりを洗ふ」(No.3)

離婚を経験した民子にとって、これらの火鉢や漬け物石は、幸せだった日々とともに、痛みを思い出させるものでもありました。

「金銀の箔の錆びたる帯重し
鋏の先をきかせてほどく」(No.4)

和服はあまり着なかったという民子ですが、傷んだ帯にはさみを入れて仕立て直しをしようとしているのでしょうか。



自筆原稿(No.2)

結婚する時、母・カネは夫婦団らんのためにと、娘に火鉢を持たせました。この火鉢は、1977(昭和 52)年ごろまでは所持していたそうで、民子と親しかった歌人・北沢郁子氏は、あまり人に見せたくない様子だったと語っています。

2　職場・街中

民子は、家の中だけではなく、職場や街についても昔懐かしい情景を歌にしています。

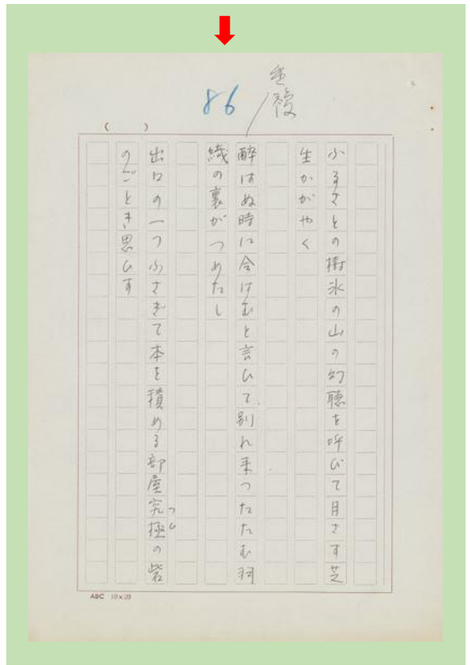
「何時までも合はぬ算盤にいらちゆく
西陽をまともに受くる座席に」(No.8)

民子が大宮に移住し働き始めたころには、職場でも算盤が使用されていたようです。当時、文化会館で働いていた民子は、経理関係の業務も任されていたのでしょうか。仕事終いが近づいたのに、なかなか合わない計算にいら立っている自身を歌にしています。

(左)写真「事務仕事中の民子」
(右)写真「県立文化会館万葉植物園にて　万葉講座」

「伝言板のわが名すばやく拭き消して駅を出づれば木枯らしの町」(No.9)

この歌の中で出てくる伝言板とは、かつて駅に置かれていた黒板のことだと思われます。誰かと駅で待ち合わせしていたのか、木枯らしの吹く町へ出ていく姿を詠んでいます。



自筆原稿(No.12)

友人の歌人と酒席に居合わせたのでしょうか。こんどは酔ってない時に会いましょうと言って民子は帰ってきました。アルコールのせいで体温が上がっていたせいか、羽織の裏地を冷たく感じたのでしょう。

3　着物

いつも洋服で過ごしていたという民子も、かつては着物を着ていました。釜石の高等女学校で、教員をしていたころに撮影された写真には、和服姿の民子が写っています。現在、民子の着物は紋付羽織と縞長着、大島風の羽織・長着が遺されており、この3着は生前民子が自分自身で整理し保管していたものと思われます。

「酔はぬ時に会はむと言ひて別れ来つ
たたむ羽織の裏がつめたし」(No.12)

「着くづれを直して戻り来し椅子の
なぞへにたれの耳環か光る」(No.13)

教員時代だけではなく、大宮に来てまもないころも仕事の行事や、短歌の式典などの際に和服を着ていたのでしょうか。着付けも自分でこなしていたそうです。